

ライチョウってどんな鳥？



夏羽(オス)

“赤”は、オスの特徴です

ライチョウのオスは、目の上が赤く、繁殖の時期や興奮している時に赤い部分が大きくなります。

1年に3回、羽の色が変わります

ライチョウは、体の羽が、季節によって変わります。羽が抜けるたびに違う色の羽が伸び、体の色が変化していきます。

体の色が変わることで、外敵から身を守るための保護色になると言われています。



冬羽(オス)



冬羽(雌)・オス・雌・オス

ずんぐり丸い体

気温の低い高山域で体温低下を防ぐため、体高に対して表面積の少ない丸い体をしており、丸い体ですが、飛んで移動することもあります。

爪まで毛に覆われています

足は、爪まで羽毛に覆われており、寒い冬を乗り切るための工夫の一つです。また、羽毛があることで雪の上を歩きやすくなります。

ライチョウってどこにすんでいるの？

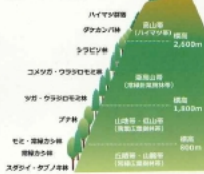


ハイマツから顔を出すライチョウ

標高2,200m以上の高山帯

本州中部の標高2,200m以上のハイマツと呼ばれる植物や岩石が多く存在する場所に住んでいます。
山頂が雪で覆われる11月頃からは、少し標高が低い、ダケカンバが生える林で群れをつくり、生活します。

《南アルプスの植生》



南アルプスでは、標高2,600m以上に高山帯が広がります。



ダケカンバ林

写真：廣田和弘

南アルプスは、ライチョウ生息地の世界的南限

ライチョウは、国内では頸城山塊(くびさきかい)、北アルプス、乗鞍岳(のりくらだけ)、御嶽山(おんたけさん)、南アルプスに分布しています。
ライチョウは国外にも分布していますが、ライチョウ生息地の世界的な南限は、南アルプスのイザル岳(静岡市)です。

高山植物とライチョウ

春～秋にかけては、高山帯に広がる高山植物やハイマツの実、昆虫がライチョウの餌となります。冬は、ダケカンバなどの冬芽を食べ、厳しい寒さに耐えています。



ライチョウは氷河期の生き残り!?

氷河期と ライチョウの 生息場所

ライチョウは北半球の寒い地域に広く分布していました。日本が大陸と陸続きだった氷河期に北の方から日本へやってきました。そして、氷河期が終わり、地球が暖かくなると、氷河期に日本へやってきたライチョウは、生きていくために寒い場所を求め、高い山の上へと生息場所を移し、南アルプスの高山帯にたどり着きました。氷河期から南アルプスに生息しているライチョウはとても貴重な動物で、“氷河期の遺存種(いそんしゆ)”と呼ばれています。



イラスト「南アルプスの大自然 豊かな生命のみなもと」より

南アルプスの 厳しい環境

3,000mを超える山々が連なる南アルプスは、気温が低い、風が強い、一年の大半が雪に覆われている、崩壊地であるため地面が安定しないなど、動植物が生育・生息するにはとても厳しい環境です。ライチョウをはじめとした動植物は、長い年月をかけてこの環境に適応しながら、南アルプスに生き続けています。

その他の氷河期遺存種



チョウノスケソウ



ムカゴトヲノオ

寒い環境で生き抜く工夫

タカネマンテマのぶっくりと膨らんだ“ぼんぼり”のような部分(☆)に日が当たると、外気よりも5~6度、中が温かくなります。温められることで、成長や子孫を残すために必要な大事な器官が守られています。

☆ぼんぼりのように膨らんでいるのは“かく”と呼ばれる部分で、花は、このぼんぼりの先端につきます。



タカネマンテマ



ムカゴトヲノオ

ライチョウが危ない!!

数を減らす 南アルプスのライチョウ

1980年代には、ライチョウの生息数は約3,000羽と推定されていましたが、2000年代には約2,000羽弱に減少したと言われています。
国の絶滅危惧Ⅱ類(VU)から絶滅危惧Ⅰ類(EN)に引き上げられ、保護の取組が進められています。



減少の主な理由

- ニホンジカが高山域に分布を拡大し、ライチョウの食物である高山植物を採食
- キツネやテン、チョウゲンボウ等によるライチョウの捕食
- 気候変動によるライチョウの生息環境、植生等への影響
- 登山客等の増加に伴う生息環境の攪乱



国、動物園等の取組

生息域内保全

死亡率が高いライチョウのヒナが大きくなるまで、元々の生息場所である高山域で保護を行っています。

生息域外保全

高山域で捕獲したライチョウの卵を動物園等で孵化・繁殖させる取組が始まっています。



写真：中村浩志

静岡市の取組

生息状況の把握

市内のライチョウ生息状況調査を行い、国等と連携した保護を進めています。

生息環境の保全

ライチョウの食物となる高山植物をニホンジカ等の食害から守るため、柵の設置による高山植物の保護に取り組んでいます。



～わたしたちに出来ること～

登山のマナーを守り、 ライチョウをそっと見守る

登山者が踏めた残飯を求めて、ライチョウの生息環境に大型の動物が侵入してしまいます。マナーを守り、離れた場所からライチョウを見守りましょう。

地球温暖化を防ぐ

地球温暖化による気温の上昇は、積雪量の減少や植生の変化など、ライチョウの生息環境に影響を与えています。節電や節水など、小さなことから始めましょう。

なわばり

4月頃、オスは、なわばりを持ちます。
なわばりを守るため、岩や木の上で見張りをします。
見張りは、ヒナが孵化(ふか)するまで続きます。

繁殖と産卵

ライチョウは、一夫一妻でつがいとなります。
巣はハイマツの中に作られ、6月中旬から下旬にかけて、5~6個の卵を産みます。



春

子育て

卵を温めるのはメスだけで、一日に2、3度の食事をとるとき以外は巣を離れません。

卵は、7月上旬から中旬頃、温め始めてから22~23日で孵化します。

孵化(ふか)すると、オスが守り続けたなわばりは解消されます。

子育ては、メスのみが行います。ヒナは体温調整が出来ないため、母鳥の腹の下に入って休みます。



夏

冬



省エネ生活

雪で覆われる冬は、エネルギーを使わないよう歩いて移動することが多くなります。
休む時も、寒さから身を守るために、雪の中にもぐるがあります。

秋

ヒナの成長

8月頃になるとヒナも大きくなり、羽が抜け替わることで、親鳥と似た色になります。



群れの形成

10~11月にかけて、親と変わらない大きさに成長したヒナは、冬に向けて真っ白な羽に抜け替わります。
この時期になると、メス、オス、若鳥が一緒になり、10羽前後の群れをつくります。

動物



ホンドオコジョ



ニホンカモシカ



ミヤマシロチョウ ☆



アカイシサンショウウオ



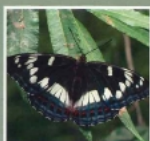
ホシガラス



ツキノクマ ☆



アズミトガリネズミ ☆



オオイチモンジ ☆

☆印の写真:NPO法人静岡県自然史博物館ネットワーク

植物



タカネヒランジ



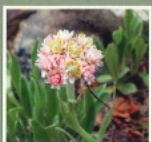
タカネマツムシソウ



オオサクラソウ



ミヤマシオガマ



タカネヤハズハハコ



ミヤマキンバイ



ミネズオウ



ハクサンシャクナゲ